第3種郵便物認可
第3種郵便物認可

NIE全国大会神戸大会

いのち守る学びへ

「時代を読み解き、いのちを守るNIE」

全校生徒が記事スクラップ

西宮市立浜脇中

兵庫県西宮市立浜脇中学校は、全校生徒約800人が各自で「NIEノート」（記事スクラップ）を制作している。公開授業では、渋谷仁崇主幹教諭が「いつも通りのりましょう」と呼びかけ、3年生の生徒がそれぞれ切り抜いてきたニュースについて発表し合った。

ある男子生徒は、ロシア・カムチャツカ半島付近を震源とする地震を取り上げ、「津波警報が出ているが、実際は注意報で、地域に津波被害が出なかった」と報告。渋谷教諭が「僕は何も（知えて）言うことがありません」と言って授業を締めくくると、助言者の西宮市教育委員会の秦淳也指導主事は「授業が終わった後、『何も言うことがない』と、僕も言ってみたい。まさに現行の学習指導要領が進めている、子どもたちの主体的な学びが実現されていた」と総括した。

NIE全国大会の公開授業で、ニュースについて話し合う兵庫県西宮市立浜脇中学校の生徒たち＝1日、神戸市の甲南大学

巡り、総務省が情報の偏りという性に注意を呼びかけたいう記事に注目。インターネット上で自身が住む地域に「津波警報が出ている」と目にしたが、実際は津波注意報で、「善意の拡散がこうしたデマを生む。メディアリテラシーは、自分の命を守るために大切だと感じた」と述べた。

発表が一巡すると、渋谷教諭は、新たに配布した新聞紙から「熱いものを探してみよう」と提案。生徒たちが熱中症予報や地球温暖化に関する記事を挙げた上で、「こんなふうに社会って全部つながっている。さらに新聞には、命を守るアイデアたくさん載っている」と話し、「熱中症探偵」などの取組みを紹介した。

授業の最後には、生徒から「今までの活動の力が発揮できた」「NIEの授業がなかったらニュースに興味がなかった。最近は『とのニュース、授業で考えたことがある』と思う機会が増えた」などの感想が出た。

渋谷教諭は「僕は何も（知えて）言うことがありません」と言って授業を締めくくると、助言者の西宮市教育委員会の秦淳也指導主事は「授業が終わった後、『何も言うことがない』と、僕も言ってみたい。まさに現行の学習指導要領が進めている、子どもたちの主体的な学びが実現されていた」と総括した。

記事を「やさしい日本語」に

兵庫県立伊川谷高等学校の福田造三主幹教諭は「多文化共生への橋かけ」の題で、実践発表を通して「やさしい日本語」書き換えを通して「やさしい日本語」で新聞記事をまとめ直し、「やさしい日本語」で発信することで、多文化共生への意識付けを図る取り組みだ。

やさしい日本語は、日本語を母語としない人などに配慮した言葉遣いで、阪神・淡路大震災の被災地の現状や、外国人への支援が大勢集まった様子を伝えるために考案された。福田教諭はコミュニケーション類型1年生20人を対象に、新聞記事をやさしい日本語に書き換える講座を実施した。

講座の事前準備として、新聞の読み方講座や学校行事の感想文作成に「はがき新聞」を用いるなど「新聞に慣れる」期間を設けた。生徒はそれぞれ「新聞感想文コンクール」に用いた記事をやさしい日本語に書き換えた。記事の内容は「日曜生活表」「ジェンダーギャップ指数」などさまざま。限られたサイズの中でより分かりやすく伝えるためにレイアウトにも工夫を重ねた。

福田教諭は必要な情報をやさしい日本語で簡潔に発信することで「文章を読み解く力」「要約する力」が付く、どうすれば相手に伝わるかを考える、有効な言葉のトレーニングになる」と強調した。

やさしい日本語で新聞記事を書き換える取り組みを紹介する福田造三教諭＝1日、甲南大学

兵庫県立伊川谷高

新聞で生徒と社会つなぐ

兵庫県立のじぎく特支高等部

兵庫県立のじぎく特別支援学校高等部の藤本友美元教諭（現上野ヶ原特別支援学校教頭）は、2023年度からの2年間のNIE教育で、新聞を活用して社会とつながる授業について実践発表した。授業は「グループ国語」と「ホームルーム」「社会生活」で取り組んだ。

同校は小中高等部と分教室合わせて128人が在籍している。うち、NIEに取り組んだのは高等部の生徒24人（軽度の障がい14人、重度の障がい10人）。

1年目は新聞に慣れることから始めた。「知る、見る、聞く、伝える」力を付け、記事中の漢字や国など「分からないことを聞く」姿勢などを身に付けた。気になる記事を切り抜き、新聞作りにも挑戦した。

2年目は「新聞でつながる」をテーマに日常生活に生かす授業を展開。新聞作りはグループを作り、取材や紙面の構成などを決め、話し合った。給食をテーマにした新聞作りでは、栄養教諭らに細かく取材した。食品トレー容器製造の会社の社員に話を聞き、トレー容器のリサイクルについての新聞も作成した。取材や新聞作りなどを通じて、近隣の県立高校との交流では生徒が率先してコミュニケーションを図るようになったという。

藤本元教諭は「メモの取り方、話し合いの仕方など、新聞を通して卒業後の社会に生きていくために必要な力が身に付いた」と実績を強調した。（金城実倫）

授業で新聞を活用し、「さまざまな力を身に付けた」と語る藤本友美元教諭＝1日、甲南大学

新聞に〝ツッコミ〟対話深める

兵庫県立北神戸総合高

「新聞に『ツッコミ』を！」。兵庫県立北神戸総合高校の公開授業では、1年生が2人1組で見出しを読んで疑問に感じた点などに「ツッコミ」を入れ、来場者と対話した。生徒自ら記事として捉え、題を自分事として捉え、他者と交流を深めながら新しい視点を見い出すことなどが狙い。「産業社会と人間」一般的な探究の時間」の授業の一環で久保淳平教諭が務めた。

同校は今年4月に合併し、1学年が約360人に増えた。公開授業は、他者との対話の中で思考を再構築し、多様性社会の実現に向けて、自分には何ができるかなどを学んでもらう。

授業では、生徒が授業を見学した教諭や記者らと「ツッコミ新聞」を作成。「退陣」と書いて「辞任」と読ませるなど、新聞を再構築するために様々なインパクトのある見出しを付けることもあり笑いが起こった。

別のグループは参院選で争点になった外国人政策について「ツッコミ合った。生徒からは「意見を聞いてもやもやすることもあったが、新しい考えを得ることができた」と話した。

久保教諭は「ツッコミを入れながら多様性のある社会について深く考え、他者とつながり、行動を起こす主体性を育てたい」と述べた。（金城実倫）

作った「ツッコミ新聞」を来場者に見てもらい、説明を交わす北神戸総合高校の生徒＝1日、甲南大学

書き手の思いを推察

姫路市立豊富小中

新聞記者は、どんな思いを記事に込めたのだろう？。兵庫県姫路市立豊富小中学校は、全国の子どもの新聞に掲載された記事を読み比べたり、記者から直接話を聞いたりすることで、情報の背後にある記者や編集者の思いを考える公開授業を行った。

授業には小学6年生の子どもたちと、記者役の豊富小中学校の児童たちが参加。新聞記者は、子どもたちの質問に答えながら、新聞作りの苦労や、記事を書く際に心掛けていることなどを話した。

子どもたちは早速、グループで話し合った。写真、レイアウトの違いを指摘した上で「記事の写真が使われているのは、大震災を知らない子どもに震災を自分事としてとらえ、知ってもらうのが大事だと（記者は）考えたからじゃないか」「記者が感じたことを伝えるために、物語風に書いている」などと意見を交わした。

授業に出席した岡田晃子さん（11）は「時間がたつと、被災した人の記憶も変わるのかなと感じた」と振り返った。

授業は、メディアリテラシーを身に付ける目的で行われた。担当した前野翔大教諭は「受け取った情報をうのみにするのではなく、一歩引いたところから眺めたりとらえられるようになってほしい」と狙いを説明した。

NIE全国大会の公開授業で、新聞記事を題材に話し合う兵庫県姫路市立豊富小中学校の児童たち＝1日、甲南大学

ICTで利便性向上

愛徳学園中・高

情報通信技術（ICT）を使ったNIE活動の実践発表「ICTで拓くNIEの新たな地平」と題して実践発表する愛徳学園中高の木田俊彦教諭（壇上左）＝1日、甲南大学

ICTの活用で、新聞の電子版を使って、タブレットで効率よく生徒と記事を共有する実践法や、新聞データベースを基にした情報比較の試みなどが報告された。

愛徳学園中学校・高校の米田俊彦教諭と廣畑彩久教諭が発表した。米田教諭は「ICTの導入で情報収集が増えた。共有や編集がやりやすくなった実例を挙げて説明した。

その上で、交流サイト（SNS）が情報源の主になって分析が広まりがちな社会において、裏付けを経た正確な情報の重要性を指摘した。

廣畑教諭は、授業での新聞作りの現場で、生徒が書き直したり復元したりすることが、デジタルは簡単にできて心理的抵抗が低くなるという利点を紹介した。

神戸新聞社教育ICT部の武藤耕生次長も登壇し、同社が開発し琉球新報も加盟する新聞教育アプリ「NIE＋（プラス）」の活用事例を披露した。（滝本匠）

防災・減災へ発信

ポスター発表

昨年の京都大会に引き続きポスター発表もあり、小中高、大学、企業、新聞社など約70の団体がNIEの実践やアイデアを発表した。阪神・淡路大震災から30年を迎え「防災とNIE」コーナーが設けられ、24団体が新聞を使った防災・減災の取り組みを紹介。大会参加者や発表者同士で交流を深めた＝写真。

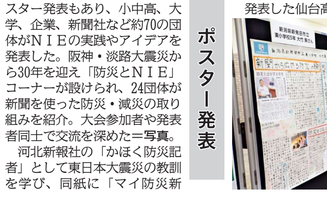
河北新報社の「かほく防災記者」として東日本大震災の教訓を学び、同紙に「マイ防災新聞」を執筆した経験などを発表した仙台高等専門学校

1年の山口岳人さん（15）は、「東日本大震災当時1歳だった。自分よりも下の世代に震災を語り継ぎ、発信する仲間を増やしたい」と意欲込んだ。（熊谷樹）

災害想定、命守る「備え」に

「防災はがき新聞」講座

「8月1日午後4時、震度6強の地震が発生。阪急電車岡本駅構内で被災し、学園本キャンパスに避難する。気温汗度、夕方の予報」。設定した災害情報を基に避難方法や想定される危険をまとめるワークショップ「防災はがき新聞を作ろう！」が1日、甲南大学で開かれた。参加者はA3サイズの紙に記事をまとめて発表し、意見を交わした。被災地のニュースを題材にした授業も行われた。



設定された災害情報に基づき防災はがき新聞づくりに取り組む参加者たち＝1日、甲南大学

想像力を育むこと重要

新聞で出合う広い世界

第30回NIE全国大会で講演する作家の小川洋子さん＝7月31日、神戸市のポートピアホテル

おがわ・ようこ　1962年岡山市生まれ。早稲田大第1文学部卒。88年に「揚羽蝶（あげはちょう）が壊れる時」でデビュー。91年「妊娠カレンダー」で芥川賞。代表作に「博士の愛した数式」「密（ひそ）やかな結晶」など。2021年に紫綬褒章を受章し、菊池寛賞にも選ばれた。兵庫県西宮市在住。

作家・小川洋子さん講演「言葉は人をつなぐ」

小川洋子さんの講演要旨は次の通り。

◇　◇

自分とは価値観が違う他者のことを想像し、言葉でつながれるのは、人間だけ。だからこそ想像力を育むことが重要だ。

例えば人間には、誰かが「死にたい」と言ったとしても、心の中では「死にたくない」と思っていることを感じ取る力がある。交流サイト（SNS）は、小説や新聞と違い、言葉を文字通りにしか受け取れない。言葉の向こう側を想像することができないと思う。

人間の心に届きやすいのは、五感に直接訴えかけてくる物語だ。紙の感触やインクのにおいなど情報が視界に全部収まる新聞は魔力的だ。

今の自分が関心がない世界の方が何千倍も広く、それを知れば大事なことと出会えるかもしれない。その意味で、さまざまな情報が視界に全部収まる新聞は魔力的だ。

パネルディスカッション

誤情報見抜く力育成　古田
情報の届け方工夫を　長沼

兵庫知事選・参院選

池上彰　昨年の兵庫県知事選、今年7月の参院選についてどう受け止めたか。

古田大輔　知事選や参院選は誤った情報が流れたのは間違いない。人間はそれぞれ「バイアス（偏り）」がある。それで誤った情報を「間違い」だと気づくのも難しい。情報過多の中、アルゴリズムを介して好きな情報を簡単に入手でき、逆に好きな情報以外が届かなくなる。そのため虚偽の情報でも「正しい」と判断してしまう。

池上　神戸新聞は知事選、参院選をどのように総括したか。

古田大輔さん

阪本真由美さん

長沼隆之　知事選では立花孝志氏、今年7月の参院選では立花氏の参政党と、SNSを使った候補者が大切だ。

古田　20年近く前から紙媒体の新聞は読まれていない。はロコミでの拡散が最も多い。SNSを使っていなくても誤情報を受け取る可能性があり、多くは意図や情報を有している。対策として、発信者の信頼・根拠・関連情報を確認してほしい。

池上　最大のテーマは私たちの命をどう守るかだ。健全な社会を作るためにNIEの果たす役割は。

阪本　災害は繰り返し起きるので、過去から学ぶことが大切。SNSが普及した今でも紙媒体でしか入れない災害の記録は多い。それらを伝える上で新聞は大きな役割を担っている。

古田　震災時の誤情報は実際に空白が生じた。有権者は交流サイト（SNS）や動画サイトを頼りに、結果的に原民の間で分断と対立が生まれてしまった。参院選では選挙期間中、ファクトチェック（事実検証）に取り組んだ。選挙公報について候補者の掲げる公約を検証。外国人政策を巡る虚偽の情報も速やかに正しく伝えた。取材班による情報ばかりでなく、読者層の多い中高年だけでなく、20代など幅広い層が参加。メディアリテラシーを育み、社会に開かれた選挙公報やファクトチェックする姿勢は良かった。ローカルメディアだからこそできる情報を得たいとユーチューブを頼った。アルゴリズムによって虚偽の情報はかりが届いてしまった。

渋谷仁崇さん

長沼隆之さん

池上　災害時にどういう情報を届けるかも課題だ。

渋谷　高校生のとき阪神・淡路大震災が発生し、山口県に避難した。当時、もっできず、もどかしかった。今起こる大震災を生徒に自分事として捉えさせるため、東北の中高生が東日本大震災の被災者に話を聞き、記事化する河北新報のプロジェクトを活用している。本校では記事を読み、災害時、自分たちの街ではどうするかを考えている。そこから近隣の幼稚園生と一緒に避難訓練をするなどの取り組みを行っている。

古田　震災から30年、震災や復興が見えない人が増えた。そこで手がかりになるのが新聞。その日を生きた人の立ち位置で見せている。今では日常的に使われる災害関連死という言葉も、新聞で社会課題を知ることで人間の幅が広がる。自分事として考えさせ、アウトプットの機会を与えることの特集をきっかけに生まれた。

パネル討論に参加した池上彰さん

パネル討論発言者（敬称略）

登壇者
■古田大輔（ジャーナリスト、日本ファクトチェックセンター編集長、元朝日新聞記者）
■阪本真由美（兵庫県立大学大学院減災復興政策研究科教授）
■渋谷仁崇（西宮市立浜脇中学校主幹教諭、日本新聞協会NIEアドバイザー）
■長沼隆之（神戸新聞社論説副委員長）
司会
■池上彰（ジャーナリスト、名城大学教授、元NHK記者主幹）

取り組みで自分事に　渋谷
過去から学ぶ大切さ　阪本

災害時の情報伝達

池上　災害時にどういう情報を届けるかも課題だ。

渋谷　高校生のとき阪神・淡路大震災が発生し、山口県に避難した。当時、もっできず、もどかしかった。今起こる大震災を生徒に自分事として捉えさせるため、東北の中高生が東日本大震災の被災者に話を聞き、記事化する河北新報のプロジェクトを活用している。本校では記事を読み、災害時、自分たちの街ではどうするかを考えている。そこから近隣の幼稚園生と一緒に避難訓練をするなどの取り組みを行っている。

古田　震災から30年、震災や復興が見えない人が増えた。そこで手がかりになるのが新聞。その日を生きた人の立ち位置で見せている。今では日常的に使われる災害関連死という言葉も、新聞で社会課題を知ることで人間の幅が広がる。自分事として考えさせ、アウトプットの機会を与えることの特集をきっかけに生まれた。

池上　災害時の誤情報は実際に空白が生じた。有権者は交流サイト（SNS）や動画サイトを頼りに、結果的に原民の間で分断と対立が生まれてしまった。参院選では選挙期間中、ファクトチェック（事実検証）に取り組んだ。選挙公報について候補者の掲げる公約を検証。外国人政策を巡る虚偽の情報も速やかに正しく伝えた。取材班による情報ばかりでなく、読者層の多い中高年だけでなく、20代など幅広い層が参加。メディアリテラシーを育み、社会に開かれた選挙公報やファクトチェックする姿勢は良かった。ローカルメディアだからこそできる情報を得たいとユーチューブを頼った。アルゴリズムによって虚偽の情報はかりが届いてしまった。

パネル討論で司会を務めたジャーナリストの池上彰さん

県内からの参加者の声

学校で実践に生かして

仲村守和・県NIE推進協議会会長
公開授業を見て、子どもたちが「NIEノート」を通して主体的に深い学びを実践している様子がうかがえた。今回、沖縄からNIEアドバイザーを含めて10人の教育関係者が参加しており、この経験を各学校などでの実践に生かしてほしい。

「ツッコミ」で考え磨く

藏根美智子・元県教育委員　初日の記念講演で作家の小川洋子さんの言葉「豊富な情報を手軽に手に入れられるからこそ、受け取る側の知性や人間性、想像力が問われる」が印象的だった。高校の公開授業で新聞への「ツッコミ」を来場者まで広げ、自分の考えを磨いた。

想像力で「自分事」に

甲斐崇・うるま市教委主幹、NIEアドバイザー　改めて新聞の意義や役割を再確認できた。誰もが発信者になれる今、情報への向き合い方が問われる。メディアリテラシーを育み、想像力を働かせて世の中の出来事を「自分ごと」にする取り組みを続けたい。

新聞に触れる機会重要

國吉美穂・興南中教諭、NIEアドバイザー　新聞は地域や防災について考え、社会とつながることができる。取材に基づいた記事だからこそ、時代を色濃く反映する。子どもたちが新聞に触れる機会を私たち教育に携わる側がしっかりと用意しておくことの重要性を再認識した。

時代読み解く力を育成

宮城英誉・国頭村教委指導主事、NIEアドバイザー　情報過多社会で生まれる課題と向き合い、自ら考え行動する自立した子どもたちを育成するヒントをもらえた大会だった。これからもNIEを通じて、時代を読み解く力の育成を図っていきたい。

防災教育の必要性痛感

宮城通就・首里高教諭、NIEアドバイザー　震災を経験している地域は災害に対する感度が高い。沖縄でも防災・減災意識を高める教育の必要性を痛感した。公開授業では新聞の総覧性を活用し、社会がつながっていることを意識させる内容が印象的だった。

災害報道の検証印象的

新垣孝子・三和中大度分校教諭、NIEアドバイザー　ポスターセッションでの災害報道の検証やデータの活用が印象に残った。震災当時の紙面を使い、記憶と記録を伝える取り組みが行われていた。統計などが事実に基づいた数値として生かされていると感じた。

真実突き止める力を

関添弘樹・瀬喜田小教諭　交流サイト（SNS）などで情報過多になっている中、新聞は情報を整理し、思考を広げる手段として有効だ。今回多くのことを学び、子どもたちにファクトチェックの重要性を理解させ、真実を突き止める力を身に付けさせたいと改めて思った。

学校現場で活動広げたい

森元一真・奥間小教諭　公開授業を通して、新聞を教育活動に生かす方法を学んだ。自分の「推し」記事を児童が選んで紹介し合う授業は、自分の気持ちを表現する場としても効果があると感じた。学校現場で、小さなことから実践して活動を広げていきたい。

社説の活用法に関心

伊波翔太朗・首里高教諭　授業で新聞の社説を活用する取り組みに関心があった。言葉の使い方はもちろん、世の中の情勢を生徒に伝えるための導入として社説を生かせる。ページをめくることで多くのニュースに出合うことができるのが新聞の長所だと思う。